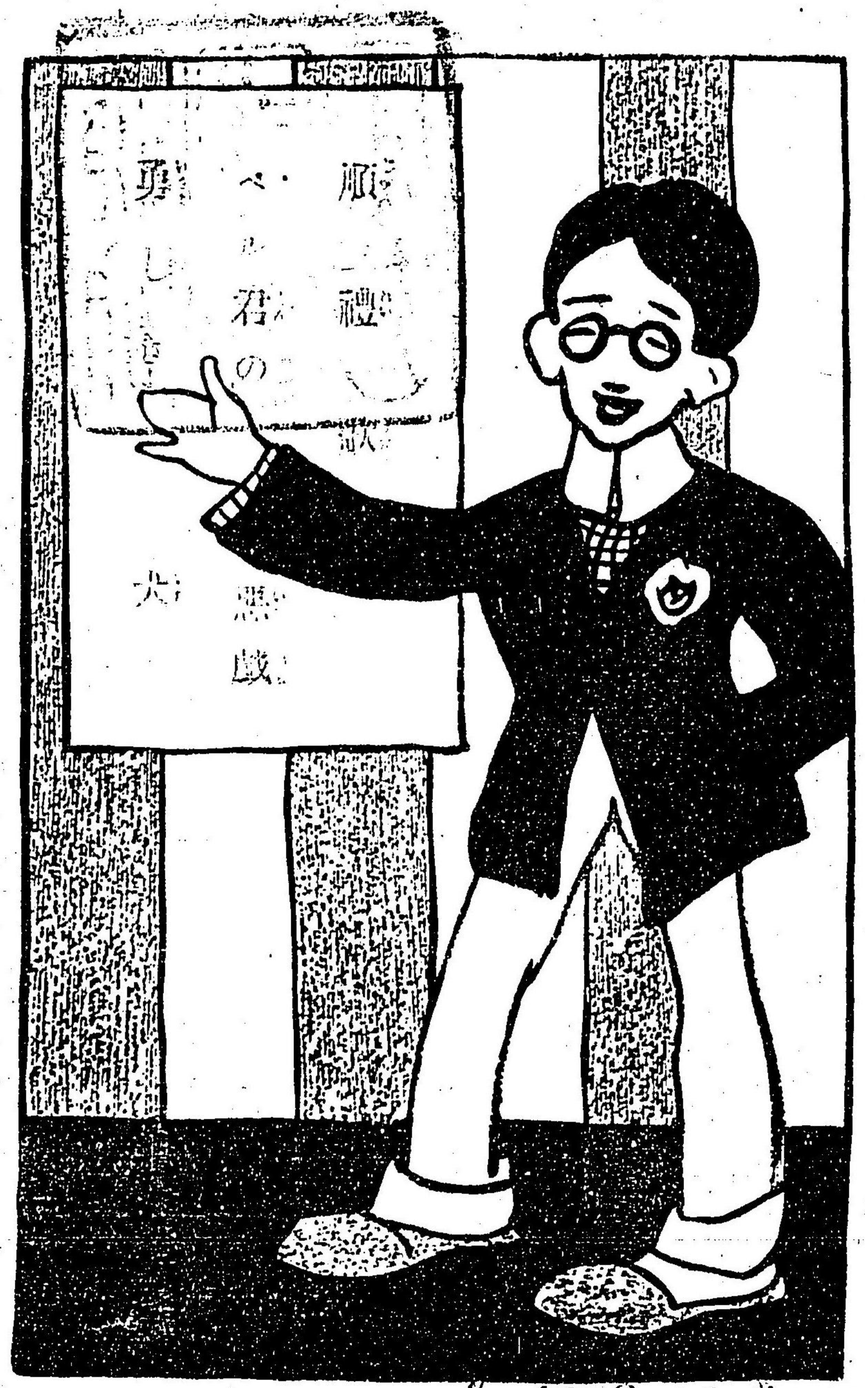


44.2.21
内交

特23
265

これは日本のお話でございます。

十郎兵衛お弓夫婦の者は悲しい事情があつて、三歳になる娘のお鶴を殘しおいて生れ故郷の阿波の國を立退くことでございました。

すや〳〵と祖母様の膝を枕に眠つてゐる愛兒の寢顔に名殘惜しい暇乞をして、ある夜更けて、夫婦は長い旅路にのぼりました。

海を越えて十郎兵衛夫婦は攝津の大坂へかりの住居をしておりました。

ある日のこと、お弓は國へ殘して來た娘の事など考へながら縫物をしておりますと門の方で可愛らしい順禮歌が聞えるのでございます。

……一疊積んでは母のため
二疊積んでは父のため……
順禮に御報謝……

どれ〳〵と、お弓は門へ出て見ますと、そこには可愛らしい順禮の兒が同行二人と記した笈摺をかけて立つてゐました。

「まあ可愛らしい順禮だこと。どれ報謝を進せませう」「ありがたう存じます」

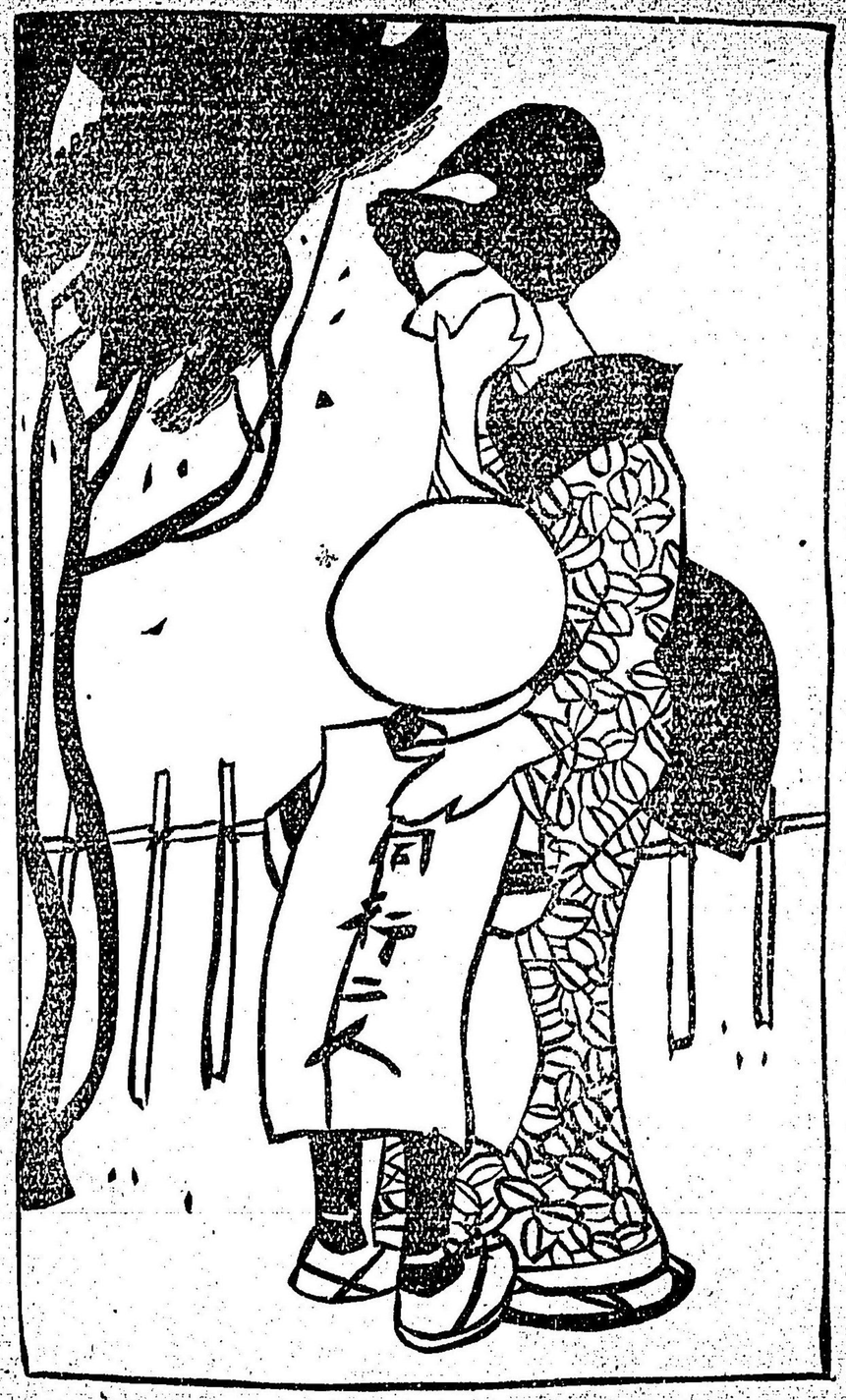
「おまへさんの國は何處だえ」「阿波の德島でございます」「まあ、私の生れも阿波なのだが、そしてまあ父樣や母樣と一所に順禮するのだろうねえ」「いゝえ、その父樣や母樣は私が三歳の年に祖母樣にあづけて何處へやら往つてしまひなさつたゆへ、こうして所々方々を尋ねて歩くのでございます」「それはまあどんなにか心細い事だろうねえ。それはそうと、その親御達の名は何といふの」

「父樣は十郎兵衛、母樣はお弓と申します」「まあ！」お弓はびつくりしたのでございます。今日も今日とて、思出してその身の上を案じてゐた生みの娘のお鶴なのですものを。見れば見るほどなつかしい昔を思はせる椎顔。そしてまあ忘れもせぬ、左の眉に見覺えのある黒子！

「まあ、私はおまへがたづねてゐるその母親だよ」と言はうとしたが、いや〳〵人に秘れた今の身の上、打あけてはこの子にも難儀がかゝるかもしれぬ由へ、悲しさを怪しさを怪さて「それはまあ年もゆかないに、はる〳〵とよう尋ねてくましたね え、その親思ひお聞きだつたらまあどんなにかお喜びなさるこだろうけれど可哀い子を捨てゆかねばならぬ親の心には、よく〳〵の事情があつてのあつ程に、かたらずく〳〵銀八なぞ世話が好いよ」「いえ〳〵勿論だい何の細ゝ世話せう、細ゝなどはしと世話けれど、もいさい時に別れましたゆへ父様や母様の顔もお覚えず、もし逢はれまいかと思へば何それが悲しうございます」「そうだろうとも ねえ。まあ私はおまへの悲しい話をきいて、つひ貰泣をしてしまひましたよ。」

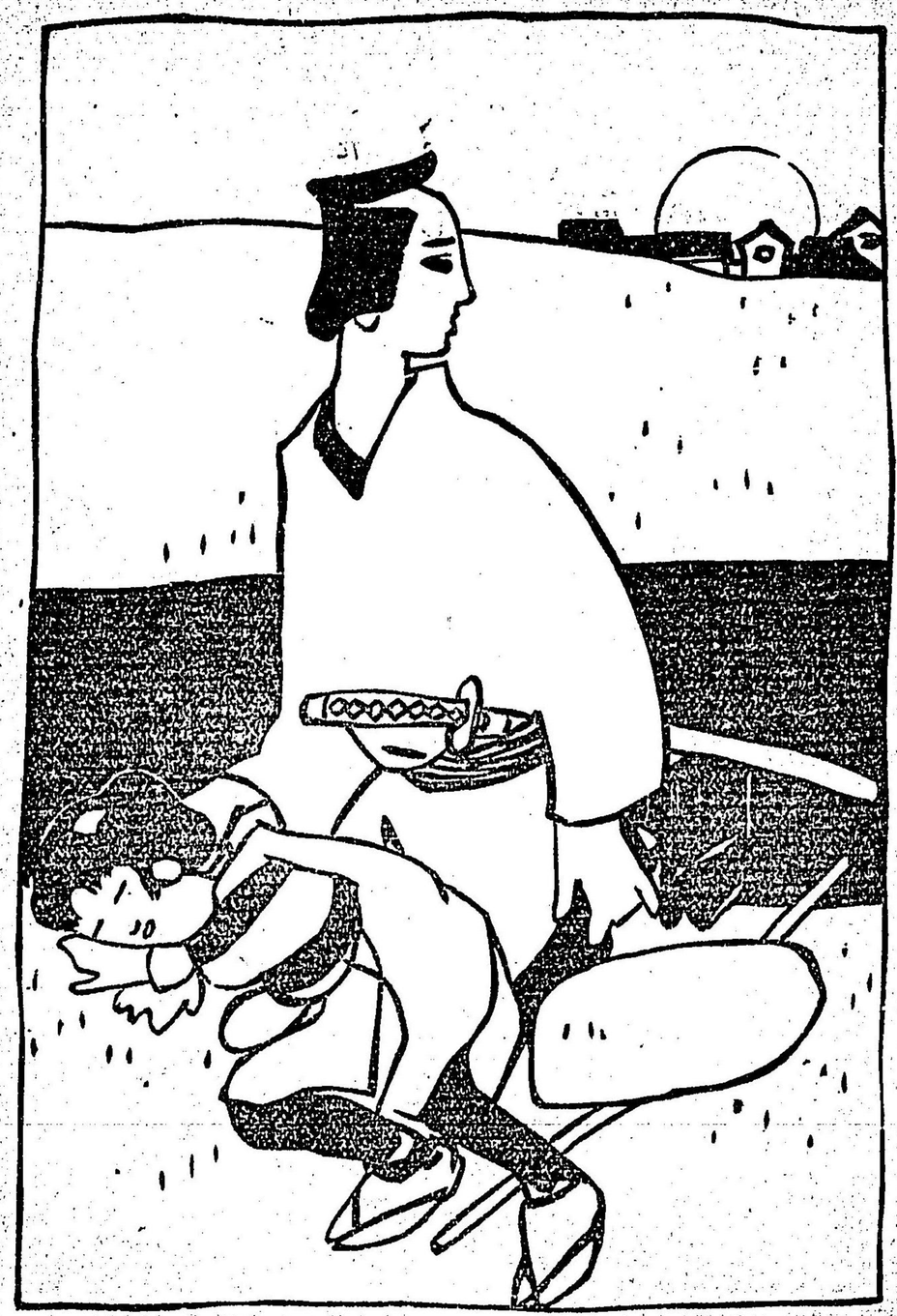
「でもまお健在でさえあれば、また逢はれないことはあるまいから、早く國へお歸り、ね。きつとこのうち、父様や母様も逢ひにゆきなさるから」「そんなにやさしく言うて泣いて下さるゆへ、なんだか母様の様におもはれて私はもう歸りたくありません……どんな事でもいたしますゆへ私をおそばにおいて下さい」「私も種々に思つて見ましたが、どうもおまへをおいてはためにならぬ條件ない譯、聞きわけておくれ。これは僅かだけれど私の志、これを路銀にしてはやく國へお歸り。それでは隨分身體を大事にしておくれね。さ、さ、そうするうちにも日が暮れる」「それではもう參ります。ありがたうございました」「路で病氣にでもならぬやうにね」「え、ありがたうございます」「それでは歸つておくれか」「さようならば」

見送り見返り、泣く〳〵ふたりは別れたのでございます。



……父母の恵も深き粉川寺
仏の智たのもしきかな……

順禮のお鶴は、やさしい他家のおばさんに別れて、そこをどうして、ぬれにも父様や母様に逢はれるこどかと、重い足を引ずりながらとぼ〳〵と街のはづれまでまゐりました。すかと、さっきお銭を貰つてゐる所を見てゐた悪漢がございました。淋しい坂路にさしかゝると、突然順禮をつかまへました。お鶴はおどろいて「あれー」と叫をたてますと悪漢は「やかましいわい」と言つて、その口へ手をあてました。お鶴は口をふさがれてそこへ氣絶して倒れてしまひました。



折しも、通りかゝつたひとりの人は、その聲をきゝつけて走つて、来て見ると、悪漢は雲を霞と逃げてしまつて、可哀そうな順禮の兒は、そこに倒れて冷たくなつてゐました。

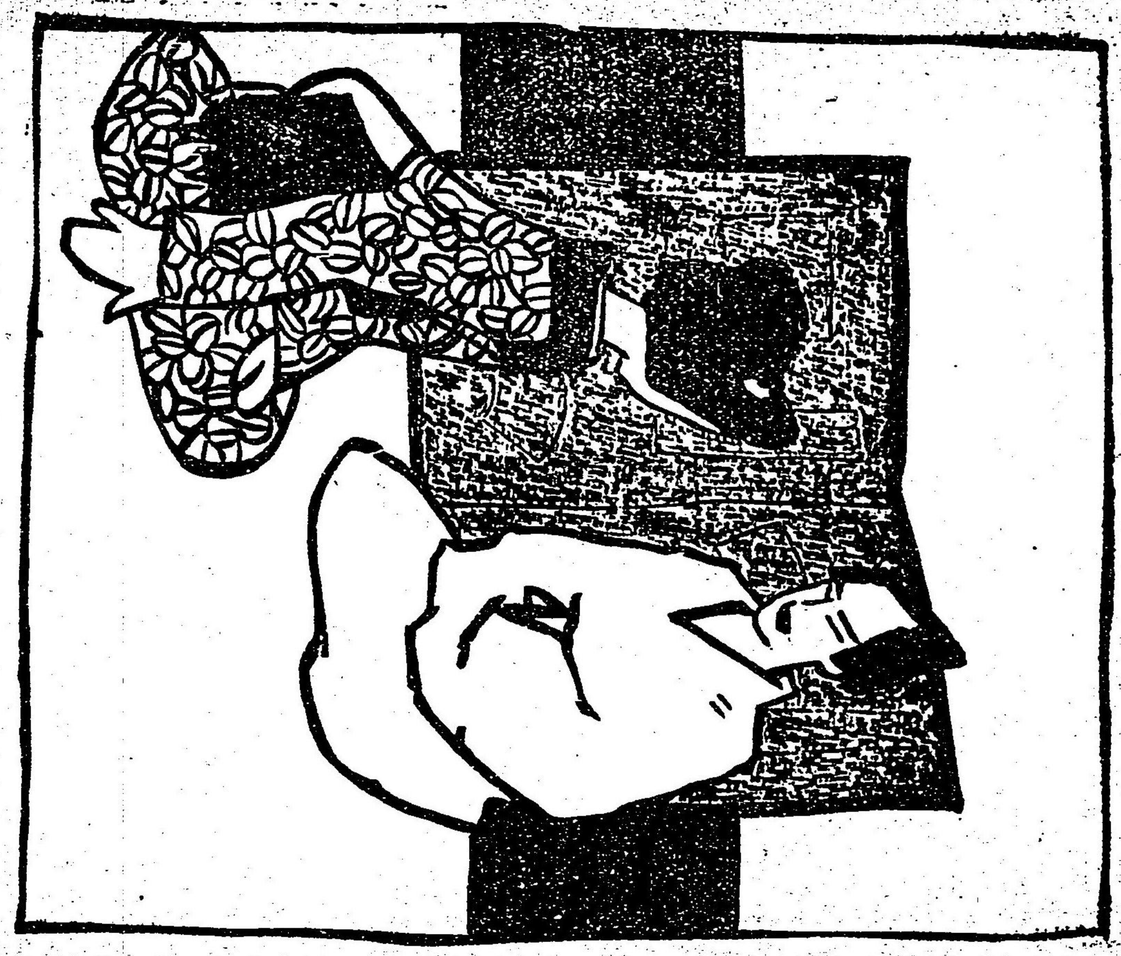
あゝ、もう死んでしまつたのでございます。

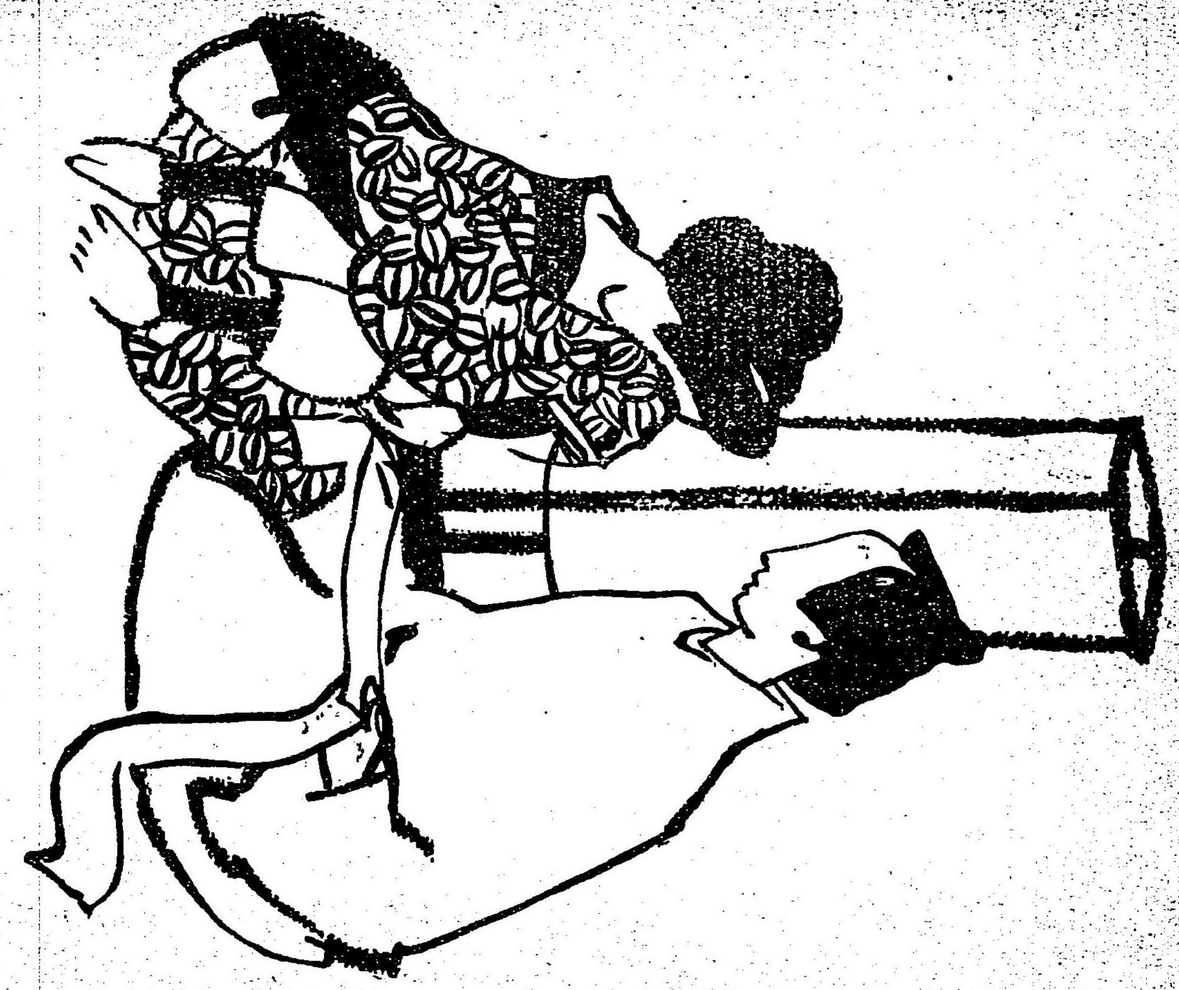
「かわいそうに、どもかくも家へ連れていつてやろう」とその人は死んだ順禮の兒を抱いて家へ歸りました。

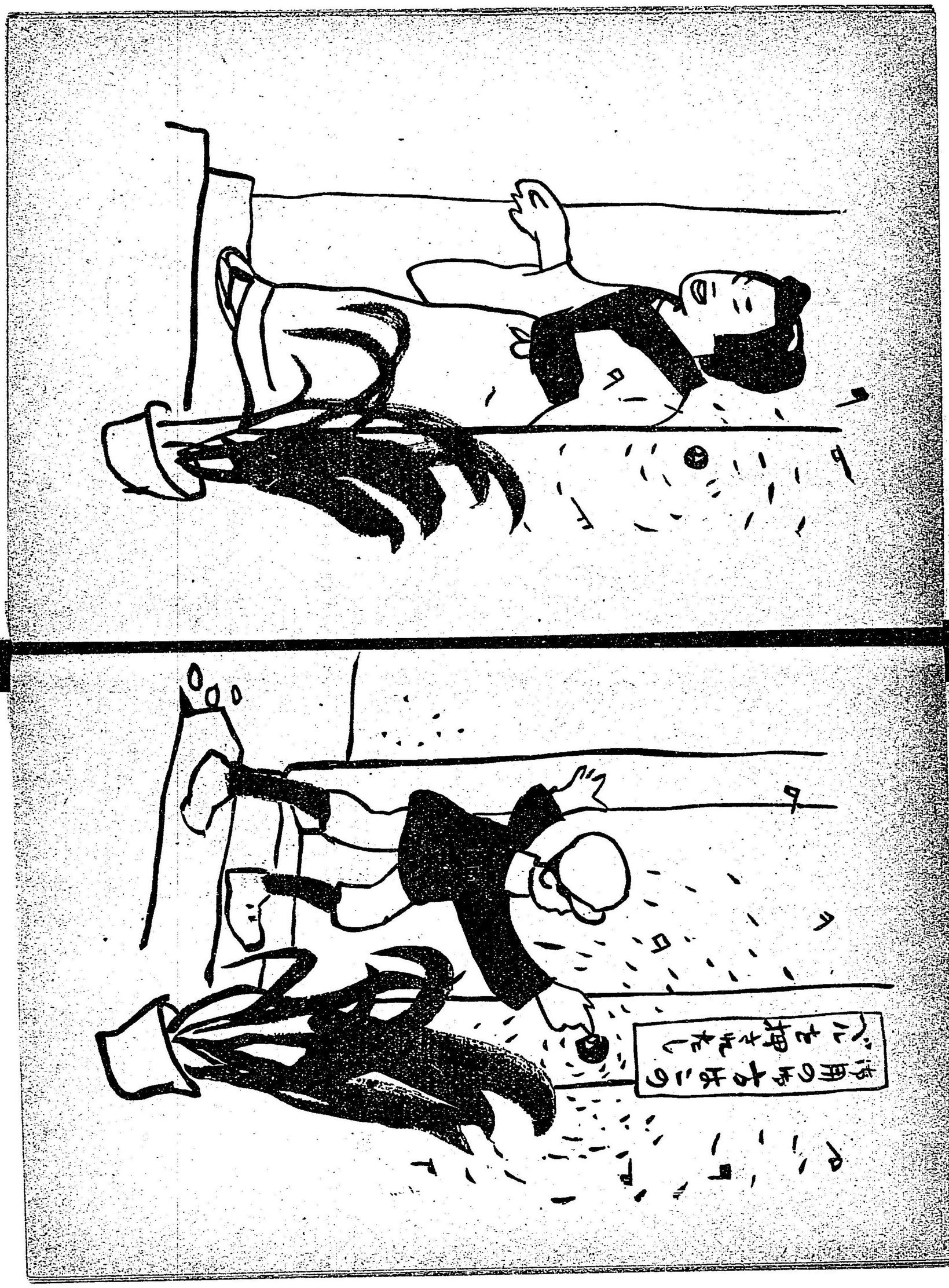
その人がこの順禮の父親であろうとは、神様でなふて誰が知つて居ましたろう。

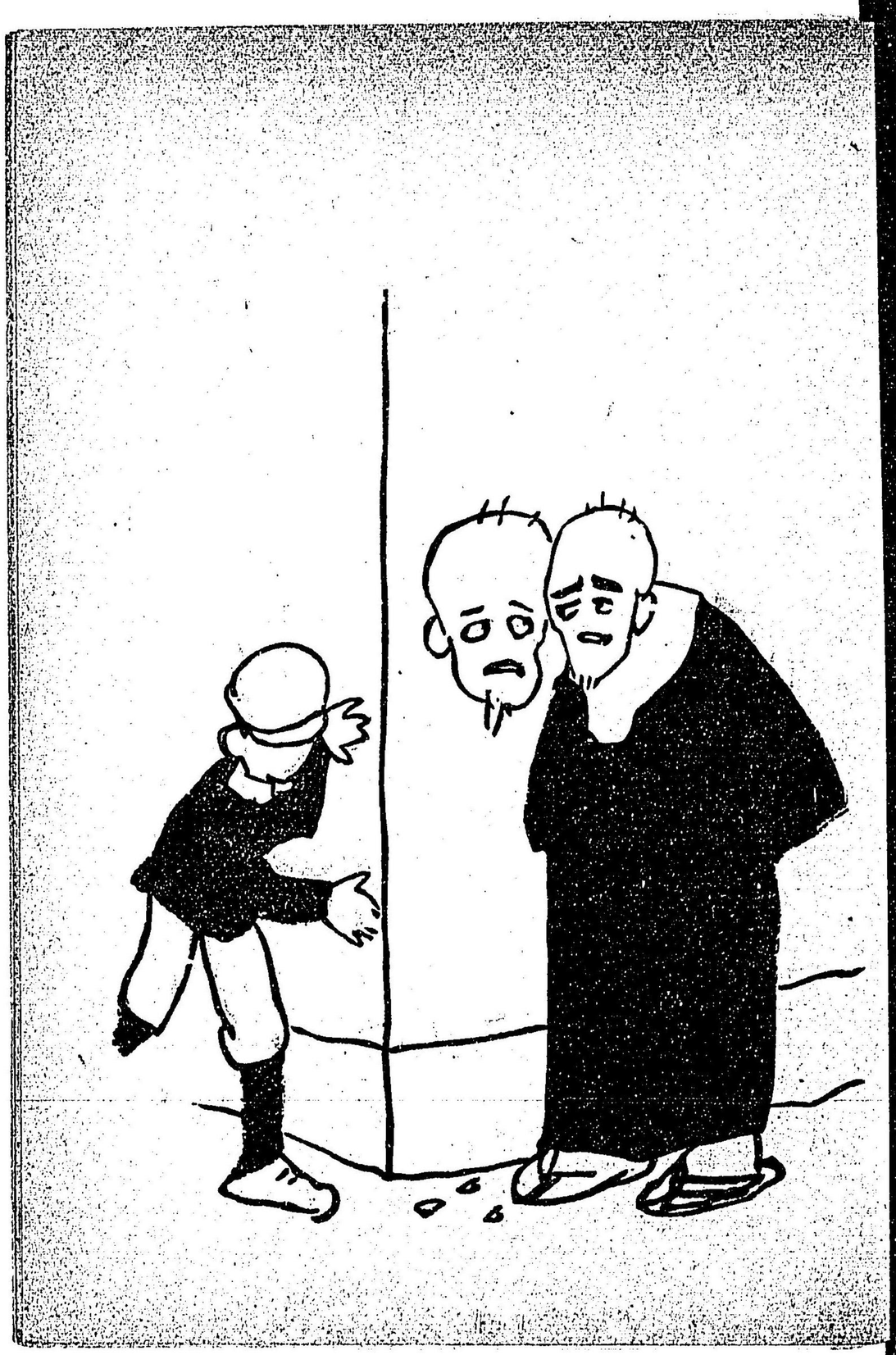
さて、お弓は可愛い我娘の後姿を見送りはしたものゝ、折角あゝして遠い海山を越えて尋ねて來たものを。今別れてしまへばまた何日逢はれるか知れやしない。たとへ難儀がかゝろうとも、いとしい子をひとり旅へ出して別れ〳〵に住んで何が樂しかろふ。もいつそ、連れて歸ふふ〳〵。そう思ひさだめてお弓は門を出て、お鶴のあとを追ふて行きました。

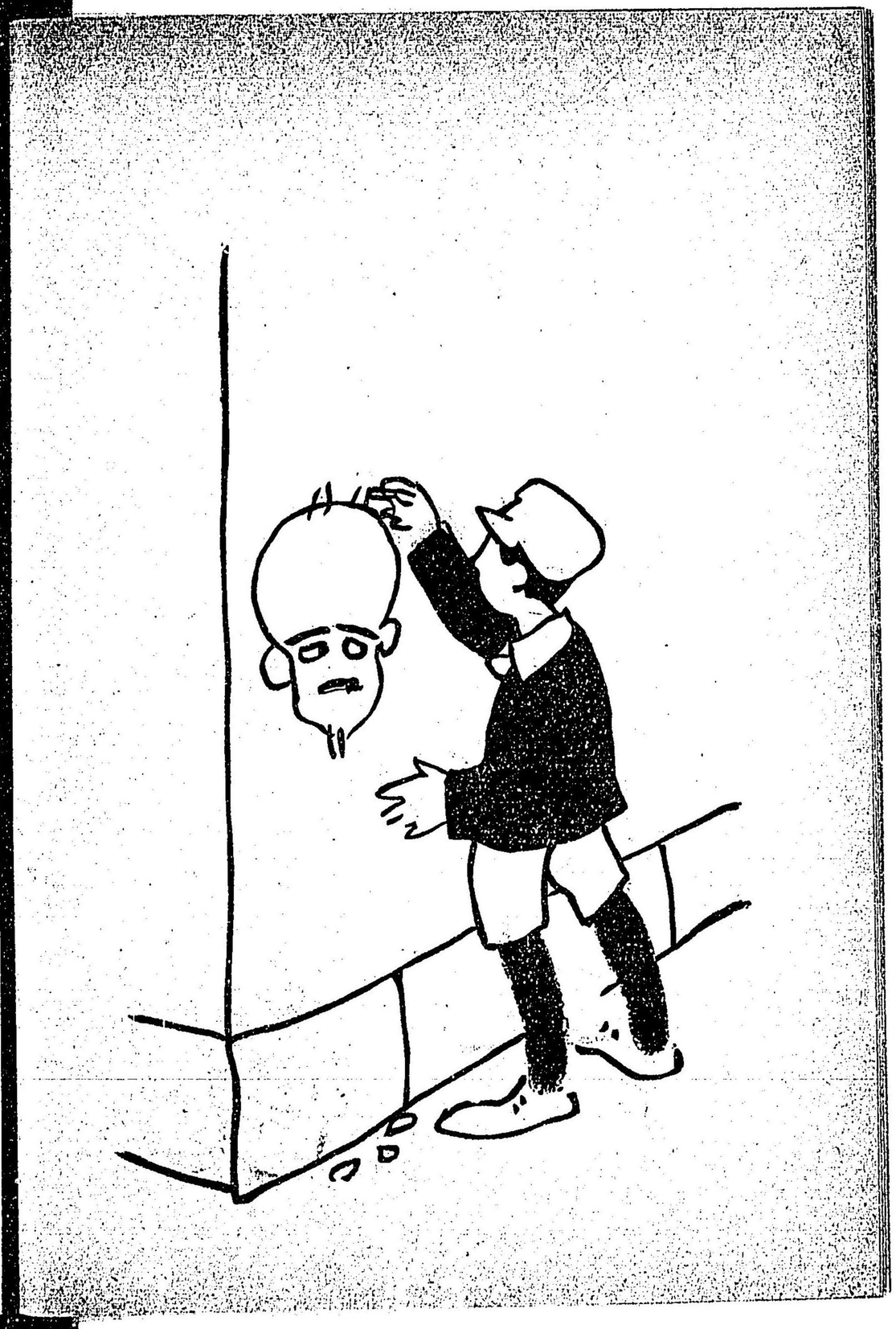
入江の鐘が淋しく鳴つて、足もとはもうすら暗くなつて、お鶴の姿は見えませんでした。

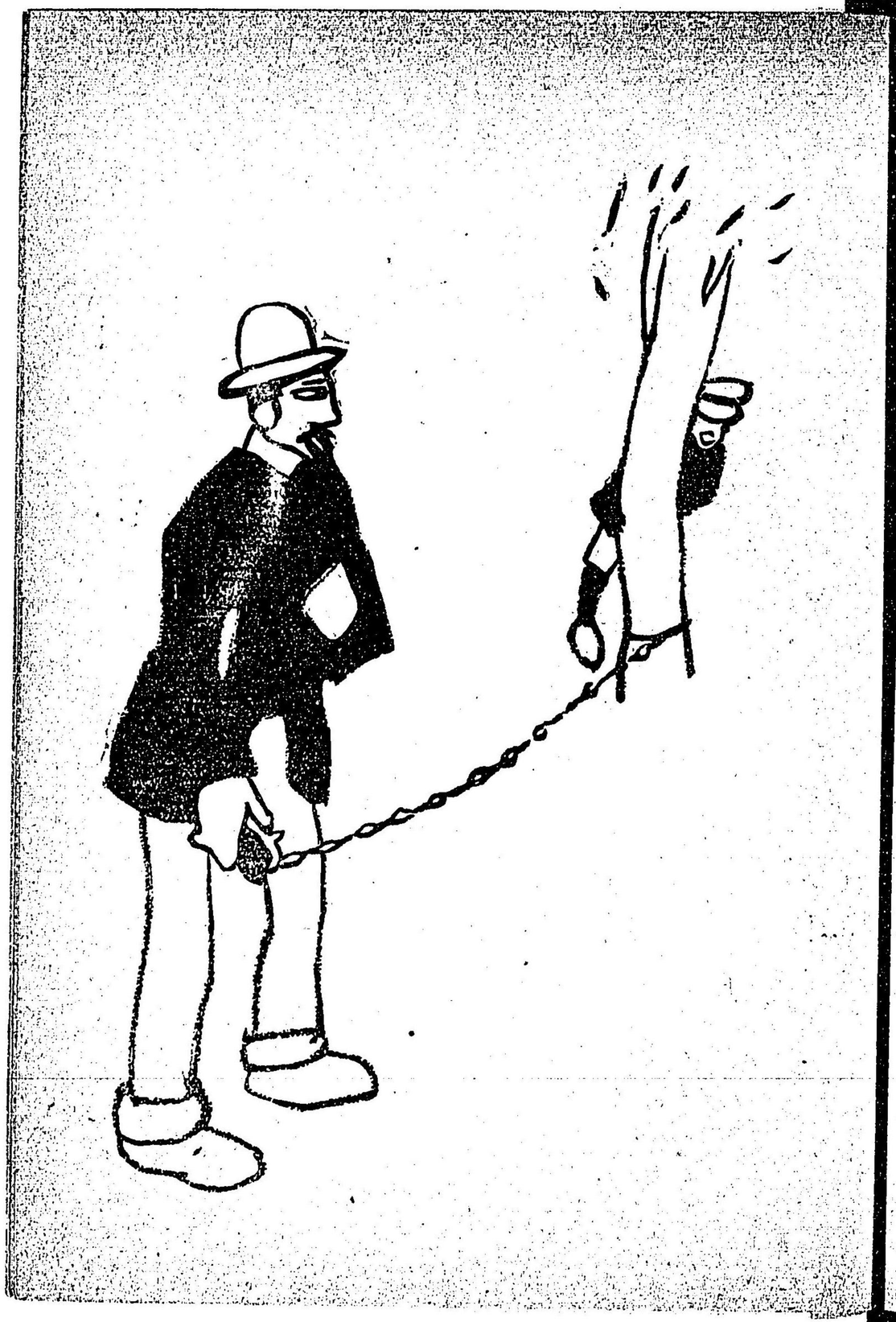





世界の未来は
どうなるんだ







せんたく
洗濯
牛乳

勇ましき犬

これは雪の深いロシヤの國の物語でございます。メチコフ、といふ二人の兄妹は、今日も學校から歸つてまゐりますとお母樣は

「おや、お歸りなさい。外はどんなにか寒かつたらうね。兄妹を勞りながら

「また御苦勞だけれど、パヽさんの許へお弊當を持つていつておくれね」

「えゝ、マムマ行つてきますよ寒くなんかあないやー」

「あたしも兄さん行つてよ」

「それぢや二人でいつておくれなさいそうしておまえ達がよく言ふことを聞いて、おくれだと、パヽさんはどんなにかお喜びなさるかー」

「マムマ。サンタクラスも御褒美を下さるわねえー」

「えゝ、えゝ。こんな感心な子供を、誰が褒めないものがありませうー」

パパさんのお給料を貰つて兄妹に家を出ました。昨夜のあとにのいてゆく大雪に、テルはクロといよ、ふたりが寒く入りの大きさしたが、自然の脚下のやうに、もらくしらと絶えず降つてゐます。

雪の森からは、自然の脚下のやうに、もらくしらと絶えず降つてゐます。

雪は、雪が降つた下に、雪いはどの吹きよしたが、

雪さん、あなたは代つて、お給料を持つてゆきなさい。

「いゝとも大丈夫、もうすぐだから」

パパさんといふのは、何から十二時まで山の中の工場で働いてゐる技師で

トラは大きな坂をのぼつてゆくとやがて工場が見えました。

アカとクロとは、よく道を知つてゐて、ふたりのまへに立つてどんく坂の

中を走つてゆきました。

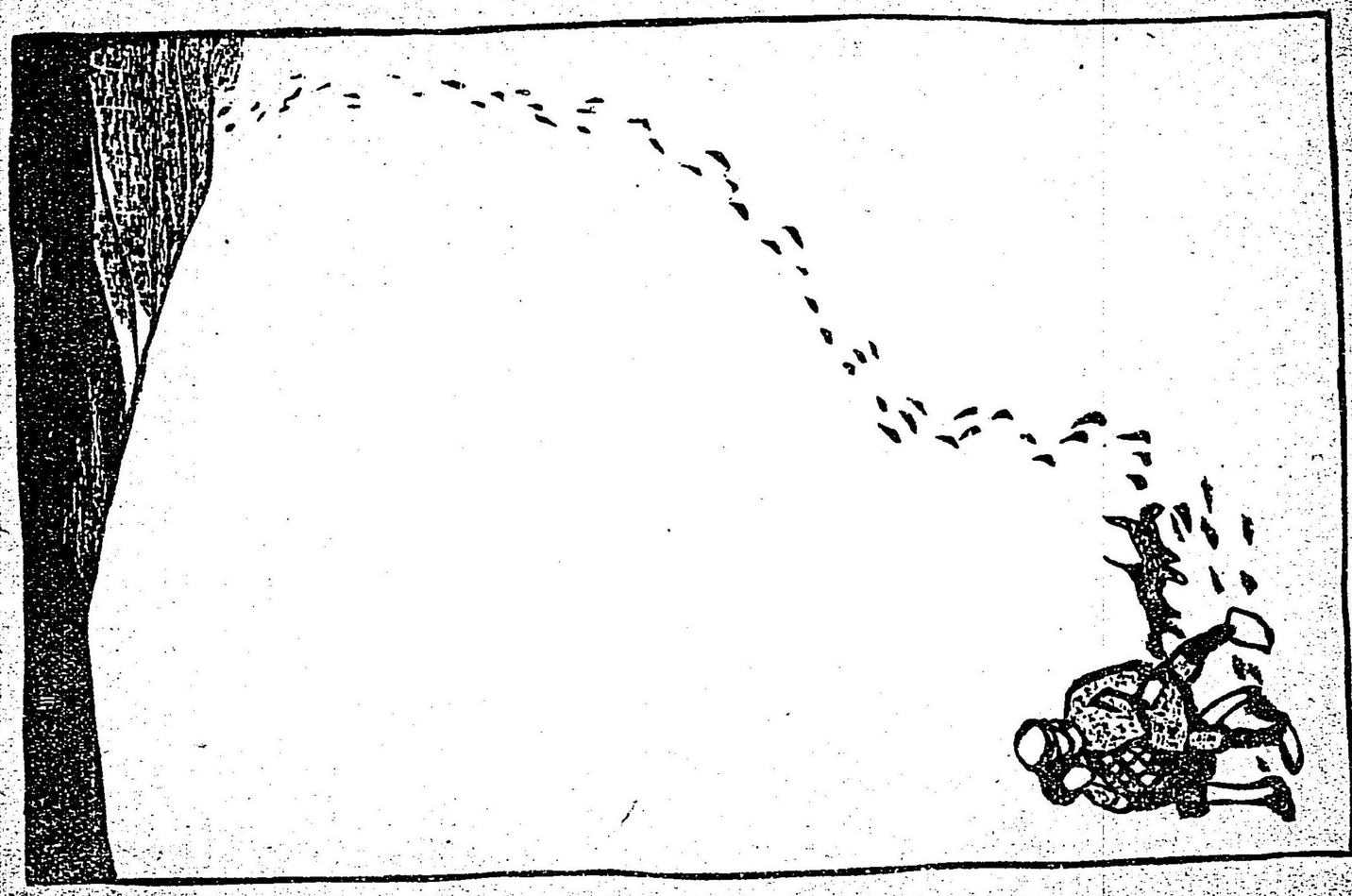
やがて工場へついて門番の男にバヽさんにお弊帛を渡すやふにことづけておいて、兄妹は犬をつれてまたもと來た道へ引返して來ました。

すると、だん〳〵と降積る雪に、さッき歩いて來た足跡ももう見えなくなり、どれが路やら畑やら少しもわからなくなりました。

歩いても歩いても、さきの路へは出ませんでした。

兄妹が、路に迷つたことに氣がついた時は、もう、マンヤさんの住んでゐる街も、バヽさんのゐる工場の煙突も見えなくなつた後のことでございました。

さあ！どうしたら好いだろう。



何處とも知らぬ家と路へ來たとき、ナンはもう、こても歩くことが出來ないのでそこへ、雪の上さしやがんでしまひました。メヂコフは自分の外套をぬいで着せたり、暖かよせて暖めてやつたりしました。けれど、見の心すくしも無駄でございました。ナンはもうすつかり冷え切つて、今は下も足も來のやうになつてしまひました。

何も知らぬ雪は、窓ガラス見物の上へ、ますます降るのでした。可哀そうに、どうすることも出來ないで姉のわきに坐つて抱してあた見のメヂコフも、いつか凍え掛つて家を失い、そこへ倒れてしまひました。

野犬のクロとアカは、主人の臨終を敬ふすべも知りませんから、たゞむやみに吠え狂ふてゐたのでございました。

さつけてやつて來たのでございます。すると、この時、一人の見知らぬ人が、氣のやうに駆けよりました。

さて、みなさん。これ、見知らぬ人は、この和に吟はれてしまつたでせうか!?

否、否。みたまへ、そこに見えるあの黒い影が、ぬつと頭をもたげてゐることを。すわこそ敵。クロ、コチラヘ回かけて飛んで来る。見て居て、この首ッキヤツを喰いついた。鮮血の、すぐに組敷いて、こんどはタヒに回つて、飛びついて来たらしいクロの四肢はあの赤い鮮血らしい血、ヒリかけた用心深く、アカはしっぽを巻の間足へその黒いあるも、逃げてゐた。

そんなにして、二匹の獣が組んで、雪は小止みなく降りつゞけ、ときどき、ぱっと、雲間から陽が差した。

けれど、安心なことには、安心なことは、悲鳴を上げて勝つこと出来ないで血みどろになつて白い雪の上に倒れ、しかしたゝかに組敷いた一匹の犬も、今は、もつへとへとに疲れ、ぐったりとなつて、ぼたぼたと雪の上に落ちる血汐をなめながらぐったりとなつて倒れ、しくしくひゝとした。

話聞つて、兄妹の母は、待てどくらせど二人の子が歸つて來ないので氣が氣ではありません。歸つて來たら呑ませよふとこしらへておいたチョコレイトを、火にかけたりはづしたり、窓から路の方を見たり、戸口まで見たり、もうそれは〳〵心配でなりませんでした。

「それにしてももう歸つて來そうなものだが、それとも道中で道草でもしてゐるのかしら、いえ〳〵あの子達に限つてそんなことはない。こんな大雪のことだから、もしや道中で何事かあつたのではあるまいか」

そう思ふと矢も楯もたまらず子を思ふ親は、心も心ならず家を出かけたのでございます。

まあこの寒い雪の日に、子供等はどこにどうしてゐることだろうと氣遣ながら街はづれまで來ますと、向ふから彼女の良人が歸つて來るのに逢ひました。

「あなた子供たちはどういたしました？」

「どうつて私に辨當をおいてすぐ歸つたが、どうかしたのか」

「まだ歸らないのでございます」

「歸らないつて」

「え、」

二人は驚いて、そのあたりに住む人々に加勢をたのみ、山の方へ探しに出かけました。

二疋の犬は戦に疲れて一時は倒れてしまひましたけれど、少しの間も、哀れなるちいさき主人のことを忘れはしませんでした。

アカはまつ身を起して、クロの耳のところへ口をあて、何か囁いたのでございます、すると、クロも何か言ました。すると、アカは、あとのことはよろしく頼みますと言つた風な様子を見せて、その場をあとに山を降りはじめました。

クロは倒れた主人のそばにすりよつて、冒険なだけその身体を暖めようと勉めてゐるように見えました。傷ついたアカは走る途中も幾度かこゝろげながらやう〳〵街の近くまで帰つてきました。この傷ついた動物がどこへ行くかは、言ふまでもありません、主人の母へ注進にいつたのでございます。

村の人々は

「それから何時間位たちますか」

「左様でございます、もう四時間にもなりませうか」

「はゝあ、それはやアどうも心配ですなあ」

などゝ話しながら山の方へ急いでゐますと、雪の中を黒いものが走つて来ます、よく見るとそれは犬らしいだん〳〵近よるのを見ると、それは血にまれた愛犬のアカでございます。その血汐の色を見るなり、一同の胸には、はつと不安な影がさしました。犬は主人の家を見るや否や、嬉しさ悲しさに尾を振り尾を振り、そして「非常の事」を知らせる様に狂気のやうに吠えるのでありました。

賢い犬は、山の方を見返つては、悲しげに泣いて見せました。恰度、あの山の中に非常な事があります。と言はぬばかりに。主人は、犬の心を知りました。

「なるほど、この犬はあれ等兄妹についてゐた犬ですから、きつとこれは、山の中で変事があつたのに違ひありません」

すると犬は主人のさきへ立つて、山路をだん〳〵と登りはじめました。途方に暮れてゐた一同は、蓬に非常に勇気を得まして、犬のあとについて山へと上つて行つたのでございます。

山を越え、谷を越えて、子を見失なつた両親と村の人々は、犬のあとを走つてゆきました。やがて、ある大きな坂路らしい所へ來ますと、しきりに犬の吠える聲がするのでした。すると、先きに立つたアカも、さも嬉しそうに小躍りしながら、その方へ、一目散に走つてゆきます。見ると遥か上の方に、これも血にまみれたクロが立つて、救ひの人が上つてくるのを見て嬉しさうに吠えてゐるのでした。

近いて見ると、そこにはふたりの兄妹が雪の中に抱き合つて凍死んでゐた。またその傍には、血にまみれた狼が、死んで横はつてゐたのを見て、一同のものは身慄いをした。

駆けよつて両親は子供を抱きあげた。

村の人々は用意して来た薪を燃して兄妹の身體を暖めた。ま

あよかつた間もなく兄妹はが気がついて、呼吸をはじめたのでご

ざいます。

両親の歎喜はいふも更なり、村の人々も兄妹の無事を喜こんだ。

死をまぬかれたメヂコンとナヽはそこに殺された狼の死骸を

見て、忠誠な犬の心を喜んだのでございます。

明治四十四年十二月十七日印刷
明治四十四年十二月二十日發行
[illegible]
[illegible]

著者　竹久夢二

發行者　東京市淺草區[illegible]町二丁目一番地　河本龜之助

印刷者　東京市麻布區[illegible]町二丁目九番地　藤田千代吉

印刷所　東京市麻布區[illegible]町二丁目九番地　千代田印刷所

發行所　東京市淺草區[illegible]町二丁目二番地　滄陽堂

2638
6553

井23
265
268
653